

大阪と奈良北部の方言に関する調査報告

—待遇の助動詞ハル・ヨル・ヤルおよび「〇〇弁」意識—

村中淑子

桃山学院大学

tmuranaka@andrew.ac.jp

A Report on the Osaka and Northern Nara Dialect : Auxiliary Verbs for Treatment Expression and an Attitude to Dialect

MURANAKA Toshiko

St. Andrew's University

*Key Words: Regional Difference inside Osaka, Generation Difference, Linguistic Identity,
Connection with the TE-form, Polite Style*

1 はじめに

大阪と奈良北部の話者に対して小規模な方言調査を行った。扱った項目は、否定表現、待遇表現、方言意識である。このうち否定表現に関しては別稿でまとめているので(村中 2014)、本稿では待遇表現と方言意識について報告する。なお、この調査で用いた調査票の全ページを本稿末尾に掲載した。

今回、待遇表現として調査したのは、待遇の助動詞ハル・ヨル・ヤルの3つであり、いずれも大阪方言として知られているものである¹。ハルは軽い敬語、ヨルは軽い罵り、ヤルは親しみを込めた表現、になるもので、「おじいさんが起きハル」「弟が起きヨル」「あの子が起きヤル」のように使える。テ形との接続、および常体・敬体の区別に注目したうえで、ハルを含む例文 13 本、ヨルを含む例文 7 本、ヤルを含む例文 8 本を作成し、それぞれを使用するかどうか尋ねた。

方言意識については、「自分のことばをどこの方言であるかとらえているか」などを尋ねた。

2 調査の概要

調査時期：2011年7月～9月。

調査対象：若年層 44 名と中高年層 18 名、計 62 名。内訳は、表 1 の通り。

調査方法：筆者の授業の受講生、すなわち桃山学院大学の学生(2・3・4年生)に対して、調査票を配布し、調査を実施した。回答記入中に同席し質問等を受け付けた。その後、3・4年生の演習受講生に依頼して調査票を持ち帰ってもらい、その家族に記入してもらった。

調査内容：否定表現、待遇表現、方言意識およびフェイス項目。

【表1】 回答者の年代・性別と言語形成期在住地域

言語形成期在住地域	若年層			中高年層			総計
	女	男	計	女	男	計	
摂津（大阪市）	10	4	14	3	2	5	19
北・中河内（寝屋川市、東大阪市、八尾市）	2	4	6	3	1	4	10
南河内（柏原市、松原市、南河内郡）	2	1	3	0	1	1	4
泉北（堺市、高石市、泉大津市）	6	4	10	2	1	3	13
泉南（岸和田市、貝塚市）	3	1	4	0	0	0	4
奈良北部（天理市、生駒市、生駒郡斑鳩町、奈良市、香芝市、大和高田市、宇陀市）	6	1	7	3	2	5	12
総計	29	15	44	11	7	18	62

表1の「言語形成期在住地域」は、大阪については、山本(1962)に従った地域区分である²。カッコ内に回答者の在住地の市あるいは郡を記した³。奈良の回答者は、奈良北部方言として1グループにまとめた。

若年層はほとんどが調査当時19～23歳の大学生（1988～1992年生まれ）だが、1984年生まれ女性と1980年生まれ男性を1名ずつ含む。中高年層は1949～1966年生まれ（調査当時45～62歳）。言語形成期については、小学校・中学校在籍時を言語形成期と見なし、調査票のフェイス項目の記入内容に従った。転居歴を記入した回答者については、小・中学校時に長く住んでいた場所の話者として扱った。ただし本調査において、転居歴のある話者はごく少なかった。

3 ハル・ヨル・ヤルの使用

待遇の助動詞ハル・ヨル・ヤルについて、それぞれの使用状況を概観したのち、個別の例文について詳しくみていく。例文は、テ形との接続および常体・敬体の区別に注目して、ハル例文13本、ヨル例文7本、ヤル例文8本を作成し調査した。

3-1 3つの助動詞の使用状況概観

待遇の助動詞ハル・ヨル・ヤルをそれぞれ「自分自身が使うかどうか」を示したものが表2である。「使う」という回答が3割に満たない部分に網掛けを付した。若年層は表1と同様、地域ごとに6グループに分けたが、中高年層は大阪・奈良の2グループにまとめた。

表2では、「使用する」という回答のごく少なかった例文を除いて集計している⁴。すなわち、ハルは13例文のうち9つ（「食べてはった」「食べてはる」「食べはりますか」「食べはる」「食べてはりました」「いてはる」「いてはります」「いはる」「いはりました」）、ヨルは7例文中の3つ（「食べよった」「食べよる」「食べてしまいよった」）、ヤルは8例文中の4つ（「食べてやる」「食べてやった」「食べやった」「食べやる」）を集計した⁵。ここで集計に含めなかったハル例文

4つ・ヨル例文4つ・ヤル例文4つ(「食べはってる」「食べはってた」「いはってる」「いはってた」「食べよりました」「食べてよる」「食べてよった」「食べてよりました」「食べやるんです」「食べてやるんです」「食べやりました」「食べてやりました」)のデータは、3-2において示す。

【表2】ハル・ヨル・ヤルを含む例文を「使う」割合

地域×世代	ハル例文 9本分	ヨル例文 3本分	ヤル例文 4本分	「使う」が3割を超えるもの
大阪／中高年層(13名)	60.7%	53.8%	40.4%	ハル・ヨル・ヤル
奈良北部／中高年層(5名)	66.7%	46.7%	60.0%	ハル・ヨル・ヤル
大阪市内／若年層(14名)	38.1%	40.5%	16.1%	ハル・ヨル
北・中河内／若年層(6名)	18.5%	44.4%	20.8%	ヨル
南河内／若年層(3名)	66.7%	66.7%	58.3%	ハル・ヨル・ヤル
泉北／若年層(10名)	17.8%	63.3%	10.0%	ヨル
泉南／若年層(4名)	25.0%	8.3%	0.0%	なし
奈良北部／若年層(7名)	69.8%	47.6%	67.9%	ハル・ヨル・ヤル
平均(62名)	44.1%	47.8%	31.0%	ハル・ヨル

結果を助動詞ごとにみると、ハルについては、中高年層は、大阪・奈良北部ともに6割以上が「使用」となっているが、若年層は、地域差が目立ち、南河内と奈良北部で6割を超えるほかは半数を割っている。特に北・中河内と泉北・泉南の使用が少ない。

ヨルについては、泉南の若年層が少ないのが目につくが、それ以外の地域では、中高年・若年層とも、半数内外の使用がある。ヨルは、大阪(泉南以外)・奈良北部では世代に関わらず比較的良好に使われる助動詞であるといえそうである。

ヤルは、地域差が著しい。若年層は、南河内と奈良北部では約6割の使用があるが、それ以外の地域ではあまり使っていない。中高年層では、奈良に比べて大阪が少ないが、それでも4割使用となっている。ヤルは、限定的な狭い地域でよく使われている形式のようである。

以上の結果を世代と地域からみると、おおよそ次のようにまとめられる。

中高年層

- ・大阪 ハル6割、ヨル5割、ヤル4割の使用
- ・奈良北部 ハル・ヤルが6割、ヨルが約5割の使用

若年層

- ・南河内と奈良北部 →ハル・ヨル・ヤルの3語形とも半数あるいは6割以上使用
- ・大阪市内 →ハル・ヨルの2語形を3割ないし4割使用
- ・北・中河内と泉北 →ヨルのみ半分弱の使用
- ・泉南 →3語形ともあまり使用せず

あくまでも本調査の限られた範囲内のことであるが、「大阪府内で、待遇の助動詞は、ヨル>ハル>ヤルの順でよく使われる」「中高年層に比べて若年層は待遇の助動詞を使わない傾向がある」「奈良北部は世代差が少ない」といえそうである。

3-2 3つの助動詞の各例文についての使用状況

以下、3つの助動詞の個別の例文についてみていく。表3～表6では、3-1の表2で省いたもの（表3～表6で*をつけて示した）も含めて、調査した例文すべての結果を示す。

まず、ハルについて。表3は動詞「いる」、表4は動詞「食べる」、に接続する例文について、「使う」という回答の人数を示した。左から合計数の多かった順に並べた。

【表3】「いる」＋「ハル」の例文に関する「使う」の人数

	いてはる	いてはります	いはる	いはりました	いはってた*	いはってる*	計
大阪市	9	9	2	3	0	0	23
北・中河内	5	4	1	1	0	0	11
南河内	3	3	2	3	0	0	11
泉北	7	6	4	3	1	0	21
泉南	2	1	0	0	0	0	3
奈良北部	8	9	8	7	1	1	34
計 (62人中の%)	34 (55%)	32 (52%)	17 (27%)	17 (27%)	2 (3%)	1 (2%)	103

【表4】「食べる」＋「ハル」の例文に関する「使う」の人数

	食べてはった	食べてはる	食べはりますか	食べはる	食べてはりました	食べはってた*	食べはってる*	計
大阪市	9	10	11	5	4	2	0	41
北・中河内	6	5	4	4	3	1	0	23
南河内	3	4	3	3	3	0	0	16
泉北	5	5	3	4	4	0	0	21
泉南	2	2	1	1	0	0	0	6
奈良北部	10	9	9	8	6	1	1	44
計 (62人中の%)	35 (56%)	35 (56%)	31 (50%)	25 (40%)	20 (32%)	4 (6%)	1 (2%)	151

表3を見ると、「いる」については常体・敬体問わず、テを介してハルに接続する形（イテハル、イテハリマス）が、テを介さずに直接ハルがつく形（イハル、イハリマシタ）の約2倍となっている。じつは「いる」の場合、テを介しても介さなくても、意味的にはほとんど差がない。「いる」は動作ではなく状態を表す動詞であり、テを介することによって状態化の意味を表す、という必要が無い（イテルを標準語形にあえて直訳すると「いている」になるが、標準語にはそのような形は存在しない）。しかし大阪方言および奈良北部方言においては、「いる」に、意味的には必要の無いテを介してハルを接続させる形のほうが、慣習的に標準となっているようである。

表4を見ると、「食べる」については、テを介した形が多いが、テを介さずに直接ハルがつく形も多い。「食べる」の場合は、「いる」の場合と異なり、テがつくことによって動作性に状態性が加わり、意味的に異なってくるので、使い分けがあるのだろうと考えられる。

奈良北部については、テを介する／介さない、常体／敬体にかかわらず、ハル使用が多い。

「いはってた」「いはってる」「食べはってた」「食べはってる」の少なさから、ハッテル（ハル+テイル）の形はほぼ非文法的であると言えそうである⁷。

次に、ヨルについて。表5は動詞「食べる」に接続する例文について、「使う」という回答の人数を示した。左から合計数の多かった順に並べた。

【表5】「食べる」+「ヨル」の例文に関する「使う」の人数

	食べ よった	食べ よる	食べて しまい よった	食べより ました*	食べて よる*	食べて よった *	食べてよ りました *	計
大阪市	16	10	1	1	1	0	0	29
北・中河内	6	5	2	1	1	0	0	15
南河内	3	3	3	1	0	0	0	10
泉北	10	8	4	0	1	0	0	23
泉南	1	0	0	0	0	0	0	1
奈良北部	7	6	4	1	0	0	0	18
計 (62人中の%)	43 (69%)	32 (52%)	14 (23%)	4 (6%)	3 (5%)	0	0	96

「食べよりました」「食べてよりました」の少なさから、敬体においてはヨルが使われにくいのではないかと推測される。ヨルはハルと同様、素材待遇語であり、常体・敬体ともに使われるはずのものである。また、ヨルは、ハルとは異なり、第三者待遇専用の形式であり、対者待遇であると誤解される可能性が無いので、下向き待遇ではあるが敬体の中で使っても差し支えないはずのものである。しかしこの結果を見ると、ヨルの待遇の低さが、対者待遇の高い場面での使われにくさにつながっている可能性が考えられる。

「食べてよる」「食べてよった」「食べてよりました」の少なさから、テヨルの形がほとんど使われていないということが言えそうである。テ+ヨルは文法的にはあり得る形であるが⁸、近年の大阪では、テヨルでなくトルの形に変化していて、テヨルが使われていないのであろうか。

最後に、ヤルについて。表6は動詞「食べる」に接続する例文について、「使う」という回答の人数を示した。左から合計数の多かった順に並べた。

【表6】「食べる」+「ヤル」の例文に関する「使う」の人数

	食べて やる	食べて やった	食べ やった	食べ やる	食べや るんで す*	食べて やりま した*	食べて やるん です*	食べや りまし た*	計
大阪市	6	5	1	3	2	0	0	0	17
北・中河内	5	4	4	3	1	0	0	0	17
南河内	4	2	2	3	2	0	1	0	14
泉北	1	0	3	0	0	0	0	0	4
泉南	0	0	0	0	0	0	0	0	0
奈良北部	8	8	8	7	2	1	0	0	34
計 (62人中の%)	24 (39%)	19 (31%)	18 (29%)	16 (26%)	7 (11%)	1 (2%)	1 (2%)	0	86

ヤルは親愛語とも位置づけられ(岸江 1998)、ヨルほどには低い待遇性を表すものではないが、上向きには使われないものである。

表6をみると、ヤルについては、ヨルの結果と同様、デス・マスのつく形を「使う」という回答が著しく少なく、敬体における使われにくさが伺える。ヤルは、ハル・ヨルと同様、素材待遇語であり、常体・敬体ともに使えるはずのものである。また、ヤルは、ヨルと同様、第三者待遇専用語であり、対者待遇と誤解される可能性はない。それにもかかわらず、このような結果が出たことから、ヤルもヨルと同じく、対者待遇の高い場面では使われにくいという可能性が考えられる(村中 2010 では「話し手が思わず感情を表してしまうほど話し相手と親しい」ときにヤルを用いる、という仮説を提示しているが、「ヤルは敬体において使われにくい」という今回の結果と関係づけられそうにおもわれる)。

ヤルは、テを介さない形もあるが、テを介したテヤルの形のほうがやや多く使われる傾向があるようである。状態性とのなじみややすさがあるようだ⁹。

以上の、ハル・ヨル・ヤルについての結果をまとめると、次の通りである。

- (1) ハルは、敬体でも常体でも使われる。
- (2) ヨル・ヤルは、敬体(デス・マスと共起した形)で使うと答えた回答者がごく少ない。「食べやるんです」が11%であったほかは、0~6%にすぎない。

- (3) テにハル・ヨルが後接した形 (テハル・テヤル) は、よく使われる。
- (4) テにヨルが後接した形 (テヨル) は、使う人がごく少ない (0～5%)。
- (5) ハルにテルが後接した形 (ハッテル、ハッテタ) は、使う人がごく少ない (2～6%)。

4 方言意識

「あなたのことばは、「なに弁」ですか (何か呼び方がありますか)。」という質問への回答を示す。表7では自由記述式の回答をそのままの形・回答順で示し、表8は延べ数でまとめた。

【表7】 あなたのことばは「なに弁」ですか (異なり)

「なに弁」か	言語形成期在在地						計
	大阪市	北・中河内	南河内	泉北	泉南	奈良北部	
大阪弁	14	2	2	5			23
関西弁	5	3	1	3	1	9	22
泉州弁				2	1		3
河内弁		2	1				3
大和弁						2	2
岸和田弁					1		1
関西弁、大阪弁		2					2
大阪弁、関西弁				1			1
関西弁、泉州弁					1		1
大阪弁、泉州弁				1			1
堺弁、大阪弁				1			1
特に無い						1	1
奈良弁(42～61 生駒市)		1					1
計	19	10	4	13	4	12	62

表7・表8とも、「大阪弁」あるいは「関西弁」という回答が多い。全体的にこの2つは拮抗しているが、奈良の話者を除いて大阪府の話者だけを見ると、「大阪弁」という回答の方が多い。

旧国名の入った「～弁」が少数ながら見られる。泉州弁・河内弁・大和弁である。

現在の市名が入った「～弁」はそれよりさらに少ない。岸和田弁・堺弁である。

また、泉州弁・河内弁はあるが、泉北弁・泉南弁・南河内弁・北河内弁といった回答は無かった。泉州弁と答えた話者は、泉北・泉南の両方におり、河内弁と答えた話者は北中河内・南河内の両方にいた。実際には、表2からも分かるように、泉州あるいは河内の内部におけることばの地域差はあるようなのだが、旧国名に東西南北をつけた形での「なになに弁」で明瞭に区別する意識は、話者の中には無いようである。

大阪市内の話者の回答には旧国名の入った回答（摂津弁、北摂弁など）は無かった。

言語形成期在住地域と「〇〇弁」の地域とが異なる話者は1名だけいた。0～37歳に東大阪市、37～40歳に吹田市、40～42歳に東大阪市、42～61歳に奈良県生駒市に在住、という男性話者である。「北・中河内」の話者として集計したが、話者自身は奈良弁を使うと答えた。

【表8】 あなたのことばは「なに弁」ですか（延べ）

「なに弁」か	言語形成期在住地						計
	大阪市	北・中河内	南河内	泉北	泉南	奈良北部	
大阪弁	14	4	2	8			28
関西弁	5	5	1	4	2	9	26
泉州弁				3	2		5
河内弁		2	1				3
大和弁						2	2
岸和田弁					1		1
堺弁				1			1
特に無い						1	1
奈良弁(42～61 生駒市)		1					1
計	19	12	4	16	5	12	68

5 おわりに

大阪と奈良北部の話者に対して方言調査をおこない、待遇の助動詞の使用と、自己方言の意識について、結果を報告した。待遇の助動詞については、奈良北部においては世代差が少なく、大阪府内においては世代差および府内の地域差がかなり見られた。

待遇の助動詞ハル・ヨル・ヤルがそれぞれ、「動詞に接続する際にテを介するか介さないか」「例文が常体か敬体か」によって使用率が異なるという結果が出た。自己方言意識については、大阪弁・関西弁といった広くくりでとらえている話者が多いことが確認された。

今回の調査はごく小規模なものであった。今後さらに調査・考察を進めていきたい。

注

1 ハルとヨルは、大阪以外の近畿中央部でも用いられる。奈良盆地では、従来使われていなかった「大阪のヤル」を既に受容している（中井(1992)）。京都では、ヤルは用いられない。ハル・ヨル・ヤルはいずれも素材待遇の働きを持つ助動詞であるが、次の表に示した通り、動作主体として取りうる人称が異なる。

	ハル	ヨル	ヤル
1人称	△ (わたしが) ~ハル	×	×
2人称	○ (あなたが) ~ハル	×	×
3人称	○ (彼/彼女が) ~ハル	○ (彼/彼女が) ~ヨル	○ (彼/彼女が) ~ヤル

ハルの1人称については、中井(1997)に京都の老年層の使用例が挙げられている。限定的な文脈で許容されるようなので△をつけた。

² 山本(1962)では、大阪府の方言を能勢方言、三島方言、摂津方言、北・中河内方言、南河内方言、泉北方言、泉南方言に分類している。

³ 本調査では「摂津」の話者は大阪市内のみなので表2以降は「摂津」でなく「大阪市」と記す。

⁴ 使用のごく少ない例文は、その助動詞が使われないのではなく、その例文が非文法的であることを示唆する可能性が高いと考え、「使用状況」を概観する際には除外してもよいと考えた。

⁵ たとえば、大阪の中年層13人分の、ハル9項目の回答を見渡すと、「○(使用する)」の数は71であった。この場合の計算は、 $71 \div (13 \times 9) \times 100 = 60.68376 \dots$ となり、表の中には60.7%が入る。

⁶ 表3以降の表では、中高年層と若年層を区別せず、地域ごとの集計のみを行う。

⁷ 高橋(1974)に、京都方言における文法的性質として、「よんだはる などとなつて、よまはつてる などにはならない」(下線は筆者)という記述がある。

⁸ テヨルの形は、前田(1965)に記載がある。

⁹ 調査票におけるヤルの例文すべてに「おいしそうに」をつけたために、状態性の意味が想起しやすくなり、テを介したテヤルの形の「使用」のほうが多かったという可能性も考えられる。

参考文献

- 岸江信介(1998)「京阪方言における親愛表現構造の枠組み」『日本語科学』3
- 郡史郎(1997)「大阪方言の特色」『大阪府のことば』明治書院
- 高橋太郎(1974)「標準語の動詞と京都弁の動詞」『言語生活』270
- 中井精一(1992)「関西共通語化の現状：大阪型待遇表現形式の伝播をめぐって」『阪大日本語研究』4
- 中井精一(2003)「奈良県方言の特色」『奈良県のことば』明治書院
- 中井幸比古(1997)「京都市方言」『京都府のことば』明治書院
- 前田勇(1965)『上方語源辞典』東京堂出版
- 村中淑子(2010)「大阪方言の助動詞「ヤル」の使用条件について」『国際文化論集』42 (桃山学院大学総合研究所)
- 村中淑子(2014)「大阪・奈良の方言における否定辞について -世代差を中心に-」『人間文化研究』1 (桃山学院大学総合研究所)
- 山本俊治(1962)「大阪府方言」『近畿方言の総合的研究』三省堂

謝辞

調査に快くご協力下さった皆様に感謝いたします。

関西方言／調査票

調査日時 2011年__月__日

桃山学院大学 国際教養学部の村中淑子と申します。

関西方言の中の地域差や個人差について調べています。

この調査でお尋ねした内容は、研究のためにのみ、使わせていただきます。許可なく個人情報を漏らすことはありません。

ご面倒をおかけしますが、ご協力いただければ幸いです。

まず、ことばを調べる関係で個人的なことを伺います。★は特に重要ですが、他の項目も差し支えのない範囲でお教えてください。

お名前★					
ご住所	府／県		市	町	
			郡	村	
メールアドレス					
生年月と性別★	年	月	生まれ	男性／女性	
お仕事					
在住歴★	歳～	歳	府／県	市	町
				郡	村
	歳～	歳	府／県	市	町
				郡	村
在住歴★	歳～	歳	府／県	市	町
				郡	村
	歳～	歳	府／県	市	町
				郡	村
在住歴★	歳～	歳	府／県	市	町
				郡	村
	歳～	歳	府／県	市	町
				郡	村
お父様の ご出身地は？	府／県		市／郡	町／村	
お母様の ご出身地は？	府／県		市／郡	町／村	
配偶者の方の ご出身地は？	府／県		市／郡	町／村	

開始時間 午前・午後_____時_____分

ふだん、家族や友達などの最も心おきなく話せる相手と話すときのことばについて教えて下さい。当てはまる選択肢に丸をつけるか、「その他」のカッコの中にお書き込み下さい。(使いそうなものが2つ以上ある場合は全てに丸をつけて、一番よく使いそうなものに二重丸をつけて下さると有り難いです。)

1 否定表現

(1)「今日は仕事に行くか」と聞かれて、「行かないよ」と答える場合、「行かない」の部分をどのように言いますか。

- a イカン b イカヘン c イケヘン d その他 ()

(2)「今日、仕事に行くことができるか」と聞かれて、「行くことができないよ」と答える場合、「行くことができない」の部分をどのように言いますか。

- a イケン b イケヘン c イケーヘン d イケレン
e イカレヘン f イケレヘン g イケヤン
h その他 ()

(3)「昨日は仕事に行ったか」と聞かれて、「行かなかったよ」と言うとき、「行かなかった」の部分をどのように言いますか。

- a イカナンダ b イカンカッタ c イカヘンダ
d イカヘンカッタ e イケヘンカッタ f イカヘナンダ
g その他 ()

(4)「昨日は都合が悪くて、仕事に行くことができなかったよ」と言うとき、「行くことができなかった」の部分をどのように言いますか。

- a イケナンダ b イケンカッタ c イケヘンカッタ
d イカレヘンカッタ e イケレンカッタ f イケレヘンカッタ
g イケヤンカッタ h その他 ()

(5) 「今日、この服、着るか？」と聞かれて「いや、着ないよ」と答えるとき、「着ない」の部分をどのように言いますか。

- a キン b キーヘン c キーヒン d キエヘン
e キヤヘン f キヤン g その他 ()

(6) 「暑いから上着を着なくてもいいだろう」と言うとき、「着なくても」の部分をどのように言いますか。

- a キンデモ b キヤンデモ c キヤヘンデモ d キンカテ
e キーヘンデモ f その他 ()

(7) 「この服、古くてだいぶいたんできたから、もう着ないでおこう」と言うとき、「着ないでおこう」の部分をどのように言いますか。

- a キントコ b キヤントコ c キヤヘントコ
d その他 ()

(8) 「この服、小さくなってしまったからもう着ることができないよ」と言うとき、「着ることができない」の部分をどのように言いますか。

- a キラレヘン b キラレン c キレヘン d キレーヘン
e キラレヤン f キレヤン g キレン h その他 ()

(9) 「明日はこのスーツを着なければならない」と言うとき、「着なければならない」の部分を何と言いますか。

- a キナアカン b キヤナアカン c キンナアカン
d キンナラン e その他 ()

2 待遇表現

次の表現の下線部分について、

自分自身が使うものに○、

自分は使わないが他の人が使うのを聞いたことのあるものには△、

使わないし聞いたこともないものには×、 をカッコ内に書き込んで下さい。

(文の最後に「～わ」や「～で」をつけたほうが自然な場合は、つけて考えてみて下さい。つけなくても結構です。)

- ・ 先生がスイカ食べてはった (or 食べたはった) わ/で ()
- ・ 先生がスイカ食べてはる (or 食べたはる) わ/で ()
- ・ 先生、よう食べはる (or 食べやはる) わ/で ()
- ・ 先生がスイカを食べはってる (or 食べやはってる) わ/で ()
- ・ 先生がスイカを食べはってた (or 食べやはってた) わ/で ()
- ・ 先生がスイカを食べてはりました (or 食べたはりました) ()
- ・ 先生、スイカ、食べはりますか (or 食べやはりますか)。 ()

- ・ あそこに先生がいはる (or いやはる) わ/で ()
- ・ あそこに先生がいてはる (or いたはる) わ/で ()
- ・ あそこに先生がいはってる (or いやはってる) わ/で ()
- ・ あそこに先生がいはってた (or いやはってた) わ/で ()
- ・ 先生、あそこにいはりました (or いやはりました) わ/で ()
- ・ 先生、あそこにいてはります (or いたはります) わ ()

- ・ あんなたくさん食べてしまいよった わ/で ()
- ・ いっぺんに食べよった わ/で ()
- ・ すごい勢いで食べよる (食べよん) ねん ()
- ・ すごい勢いで食べてよる わ/で ()
- ・ すごい勢いで食べてよった わ/で ()
- ・ いっぺんに食べよりました わ/で ()
- ・ いっぺんに食べてよりました わ/で ()

- ・ あの子、豚まんをおいしそうに食べやる わ／で ()
- ・ あの子、豚まんをおいしそうに食べてやる わ／で ()
- ・ あの子、豚まんをおいしそうに食べやった わ／で ()
- ・ あの子、豚まんをおいしそうに食べてやった わ／で ()
- ・ あの子、豚まんをおいしそうに食べやりました わ／で ()
- ・ あの子、豚まんをおいしそうに食べてやりました わ／で ()
- ・ あの子、豚まんをおいしそうに食べやるんです ()
- ・ あの子、豚まんをおいしそうに食べてやるんです ()

3 言語意識

- (1) あなたのことばは、「なに弁」ですか（何か呼び方がありますか）。
- (2) ふだん、家族と話すとき、どんなことばを使いますか。
- (3) 家族と話すときと、友達と話すときで、ことばが違いますか。
- (4) 仕事先（アルバイト先も含む）で、どんなことばを使いますか。
- (5) この調査について何かご意見がありましたら、お書きください。

★これで終わりです。ご協力くださり、どうもありがとうございました。

終了時間 午前・午後_____時_____分 所要時間 _____分

【編集後記】

『現象と秩序』創刊号をお届けします。

本誌は、2012年にWEB雑誌として構想され、本年になって環境が整い創刊に至ったものです。

発行形態としては、WEB雑誌としてだけでは、まだ十分読まれないだろうという判断から、同一のものを紙版とオンラインジャーナルの両方でしばらく発行していくことになりました。

ご愛読いただければ、さいわいです。

次号からは、連載企画も始める予定です。ご意見・ご要望は、下記発行所メールアドレスで承っております。どうぞなんなりとお寄せ下さい。

(Y. K.)

『現象と秩序』編集委員会（2014年度）

編集委員

檜田美雄（神戸市看護大学）

中塚朋子（就実大学）

堀田裕子（愛知学泉大学）

編集幹事

城野真衣（神戸市外国語大学）

『現象と秩序』第1号

2014年 10月31日発行

発行所 〒651-2103

神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 檜田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074 (ダイヤルイン)

e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

ISSN（製本版） : 2188-9848

ISSN(オンラインジャーナル): 2188-9856 *現在のWEB版は20141208誤植訂正版

*製本版と頁水準の異同はありません。

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>